

本を選ぶ

NO.434 2021年(令和3年)7月20日

●発行／ライブラリー・アド・サービス

<http://www.las2005.com>

本社 〒114-0002 東京都北区王子 4-23-4 TEL=03-6908-4643

●<ろん・ぼわん>電子版 続

●鳥の目 85

●大いなる知の空間「ヘルメスの図書館」によるこそ

●帰ってきた図書館員(61)

●図書館を離れて(第53回)

●●●●●ろん・ぼわん●●●●●

電子版 続

大都市圏の通勤電車で朝刊を広げているおっさんを見掛けなくなった。おっさんもおばさんも、若い世代もみな様にスマホを見つめている。新聞の電子版を見ているのか、SNS、それともゲームに熱中しているのか。半々なのか。いずれにしるブランケット判の新聞朝刊を広げている光景はもう消えたい。40歳代前半までの世代は、ニュースや情報を新聞を含めたマスメディアからではなく主にSNSなどから得ていると言われている。新聞の対象読者は、極論すればほぼ50歳代以上といっても過言ではなくなったと思われる。

こうなると、新聞社の主要な収入源である広告の分野にも大きく影響する。インターネット広告が主流となった今、各紙はそれなりの戦略を練らなくてはならない。すでにテレビCMですらネット広告へと多様化している。

そんな中、戦後日本の新聞各紙の広告形態としてずっと変わらず現在も続いているのが、全国紙や地方紙の出版広告だ。毎朝一面の下段に書籍や雑誌だけの広告がずらりと並ぶ。3段分を8等分した小さく細長の通称サンヤツ、6等分ならサンムツ。二面以降になると5段12割りなどもある。他国では見られない日本の新聞固有の広告習慣だ。

文化と言って差し支えないと思う。

各新聞社の一般広告掲載基準とは別に、一面のサンヤツ広告などについては別段の掲載規定がきっちりあって、各社毎にルール化されている。

1949年に最初にサンヤツを始めた朝日新聞の場合、使用できる書体は明朝体とゴシック体のふたつだけ。文字の大きさも明朝なら6ポイントから30ポイントまでと限定される。絵や写真は使えず、文字だけで表現しなくてはならない。記号についても限られた中から選ばなくてはならず、罫線も制約があり、さらに斜め罫・飾り罫は使用不可などと実に細かな制限がかかる。朝刊一面だけにシンプルに美しく品格ある紙面を作るためと言われる。限られた条件でデザインしなくてはならないので広告制作者の腕の見せ所でもある。

だが朝日新聞では実際の制作・組み版を「社組み」と称して新聞社内の広告局が行う。広告主側の仕事は原稿をルール通りに指定用紙に書き込んで入稿するまで。紙面をデジタル化したのだから朝刊の電子版紙面でサンヤツが如何に活用されるのかと期待していたが、自社の別サイト(広告ページ)でのみの展開は残念だ。

サンヤツのサイズは縦99ミリ・横45ミリ(枠内寸法)、その広告料はそれなりだ。単発だと朝日・読売では150万円近い定価が設定されている。定期利用の顧客によって実勢価格はそれなりに変動しているはずだが、いずれにしてもその小さなスペースに対して高額だ。新聞広告の相対的価値が下がる中、ここは案外健闘していると言えよう。(埜村 太郎)

「突然よく響く旋律的な鳴き声があたりの静寂をかき乱した。やがてその鳴き声は繰り返して頭上高く響く。しかしすぐ遠ざかり次第に小さくなっていき、ふいにかき消えた。それは北方のシギ・チドリ鳴き声だ。鳥たちはツンドラでの繁殖を終え、遠い南の越冬地への旅に出発したのだ。こうして鳥たちの秋の渡りの季節が始まった…」

これは私が30年以上前に読んだロシアの渡り鳥の研究書『鳥の渡り』(A.B. ミヘーエフ著/モスクワ「森林産業」発行/1981年)の序文の一節です。8月初め早くもモスクワ近郊からコチドリ、ダイシャクシギ、アカマシコが飛び立ち、森の小鳥キイロハシナガムシクイ、ホシムクドリなどが続き、9月から10月にかけてクロヅル、キタヤナギムシクイ、ヨーロッパコマドリそしてガンやカモのおびたしい群れが西ヨーロッパやアフリカへ渡ります。ロシアの人たちは10月末ナナカマドが赤く実る頃、最後まで残ったノハラツグミが姿を消して冬の到来を実感します。

ヨーロッパでは昔から季節の鳥として、ナイチンゲール(サヨナキドリ)、ウズラそしてカッコウが親しまれてきました。ベートーヴェン交響曲第6(田園)第2楽章では、フルートでナイチンゲールが、次にオーボエでウズラが、そしてクラリネットでカッコウが奏でられています。

イギリスではナイチンゲールは、シェクスピアからキーツやワイルドまで偉大な詩人により歌われ、大衆文化の象徴とされています。しかし実際にその姿を見るのは稀ですが、多くの人々は夏の夜のロマンチックなさえずりを待ちわびます。ナイチンゲールは西ヨーロッパから中央アジアの地域に繁殖し、西アフリカで越冬します。

「カッコウ、カッコウ、カッコウ」と高い鳴声を繰り返して丘陵に響き渡らせるカッコウは、イギリスではまたナイチンゲールに劣らず文学に登場し、春の訪れを知らせる夏鳥として歓迎されます。カッコウは南アフリカで越冬、ヨーロッパやアジ

アの広範囲に渡りますが、同種の中でイギリスへは春真っ先に飛び立ち、サハラを突き切つて4月中旬に飛来します。

毎年春、西ヨーロッパからロシア極東に至るユーラシアの広い地域で、キタヤナギムシクイの軽快で優雅な鳴声が聞かれます。かつてW.H. ハドソンはその小さなオリーブグリーン地の味な姿のため、イギリスの多くの歌鳥の中ではその穏やかな美しい音色に人々が気づかないことに「芍薬やダリアのかたはらで咲いているルリハコベ」のようだと表現しています。20世紀初め、この小さな渡り鳥はイギリスの夏鳥の中では最も早く3月下旬に南岸に現れ、全国いたるところ、森や茂み、沼沢地や果樹園のどこでも絶えず鳴き続けたとハドソンは『鳥と人間』(小林節雄訳/講談社/1978年)に書いています。

渡りの追跡と初鳴き

1970年代、ユーラシアやアメリカの渡り鳥の研究が急速に進み、この体重12グラムほどのキタヤナギムシクイは冬には世界中の個体が東西からサハラ以南のアフリカに流れこみ、越冬することが明らかになりました。またイギリスでは1970年以降、その個体数が44%減少したといわれます。

日本は1924年に農商務省により鳥類標識調査が実施され、戦後は1961年から山階鳥類研究所に委託して再開、71年に環境庁が設置され、72年鳥類標識ステーションが全国18か所(78年50か所)が指定され、本格的な標識調査が開始されました。1975年6月3日、千葉市幕張埋立地でふ化直後に標識放鳥したコアジサシが同年12月9日、5000km離れたパプアニューギニアのガルフ地方で回収され、日本で繁殖したコアジサシの越冬地が初めて確認されました。また日本からのツバメの南下が大陸沿いコースをとらず、沖縄→フィリピン→マレー半島南部の島しょ伝いであることが確認され

たのも1975年でした。こうした標識調査の結果がまとめられ、1979年2月『わたり鳥』（解説 吉井正／写真 叶内拓哉／東海大学出版会）が出版されました。

1982年に出版された『カラー図説日本大歳時記』（全5巻／講談社）には、「歳時暦一動物・植物」として「ツバメの初見日前線」、「カッコウの初鳴日前線」、「アジサイの開花日前線」など日本各地の四季の動植物の初鳴－初見日が掲載されています。

カッコウ科の鳥の日本への飛来は、本州では一般にツツドリ、ジュウイチ、カッコウ、ホトトギスの順といわれ、カッコウの初鳴きは5月15日前後、ハナショウブが咲く頃、ホトトギスは6月初め、アジサイが咲く時期です。

ところが昨年11月、気象庁は1953年から全国の気象台・測候所58地点で実施してきた生物季節観測を大幅に縮小することを発表しました。

縮小前は植物34種目、動物23種目を対象で全国各地のサクラの開花やウグイスの初鳴きなどが観測されていましたが、今後は植物の6種目、ウメ、サクラ、アジサイ、ススキ、イチョウ、カエデに限られ、野鳥の観測は無くなりました。都市開発などによる観測の困難が主な理由です。

私が住む街でカッコウが鳴く声を聞けなくなって何年になるでしょう。ハトより小さく頭から背が灰青色で長い尾のカッコウが、ある日突然ビルの屋上のアンテナに水平に止まり、尾を上下に動かし喉を膨らませて声をとどろかせる姿が懐かしく思い出されます。多くの野鳥が暮らしの周りから消えていく昨今ですが、「ツバメ飛来」「ホトトギス鳴く」など初見・初鳴から受ける季節感を大事にしたいと思います。

カッコウの渡り

こうした折、『世界の渡り鳥大図鑑』（著者 Mike Unwin／写真 David Tipling／監訳 森本元〈山階鳥類研究所〉緑書房2021年3月）が出版されました。長年蓄積された鳥類標識調査と近年のジオロケーター装着による追跡調査での最新の研究成果に基づく解説と写真により世界の渡り鳥66種の神

秘的な驚異の渡りの世界が紹介されています。

カッコウは世界に4亜種が分布し、イギリスやスペインから東へカムチャッカ半島、日本まで、北はスカンディナヴィアやコラ半島まで、南は地中海沿岸、北ベトナムまでのヨーロッパとアジアの全域で繁殖し、大部分がサハラ以南のアフリカ東南部で越冬します。

アフリカでのカッコウの越冬地の正確な場所は長い間の謎でしたが、近年ジオロケーターによる追跡調査で渡りのフライウェイが明らかになってきました。最近では英国鳥類学協会とモンゴルの鳥学者の共同研究で、2020年3月20日アフリカ南部のザンビアを出発したオノンと名付けられた個体がインド洋を休まず飛翔し、5月27日約1万2千km離れたモンゴルの繁殖地に到着、最高長距離飛行が記録されました。

日本でカッコウが托卵する仮親はアオジ、ホオジロ、モズ、オオヨシキリなど20種以上が知られています。托卵は仮親の卵の一つ捨て去って数を合わせ、似た色合いの卵の一つ産みます。カッコウの卵のふ化は11～13日で仮親の卵より2、3日早く、ふ化したひなは仮親の卵やひなを背にしょって巣から放り出し、給餌を独り占めにします。ふ化後17～20日で巣立ち、成長した若いカッコウは秋、長く厳しい南下の旅に独り飛び立ちます。

イギリスのカッコウの秋の渡りでは、近年中継地の火災や消失で、休息や採餌ができず死亡率が高まっています。イングランドの繁殖個体数は1991～2016年に70%減少したといわれます。これはイギリスでの春の訪れが50年前より温暖化で平均5.1日早くなり、そのため仮親の繁殖が早まりカッコウが托卵のチャンスを逃すことが原因の一つと考えられています。

日本のカッコウは来年もアフリカや東南アジアからインド洋を横断、インドや中国東部を飛び抜け、東シナ海を渡って、列島の各地に飛来することでしょう。もし幸運にしてその初鳴きが聞けたら、懐かしい鳴声から多くの物語を聞き逃すまいと思います。

（ためさだ さだと：さいたま市図書館友の会）

帰ってきた図書館員 (61)

—公共図書館の本来の使命とは—

山下 青葉

数年前から国立国会図書館のサイト「カレントアウェアネス」を愛読している。

館種や国の内外を問わず、図書館や図書館情報学に関する最新の情報がアップされているため、恥ずかしながら何のこともやらさっぱりわからない記事もあるのだが、月に二度の配信を楽しみにしている。

これまでは職場で休み時間に読んでいたのだが昨年体調を崩してからは休み時間に睡眠をとるようになってしまい、しばらく読めずにいた。この春職場が変わり、休み時間に読めるようになったので、読み損ねていたバックナンバーを読んでいたところ、「マンガ『夜明けの図書館』完結記念インタビュー」という記事が目に入った（2021年1月28日付）。

2010年11月に連載を開始した『夜明けの図書館』（埜納タオ作 双葉社）が昨年11月に完結を迎えたというもので、作者の埜納タオ氏と単行本の二巻から監修を務めていた元横浜市立図書館司書の吉田倫子氏が十年に渡る連載を振り返ってエピソードを語るという内容であった（単行本は今年二月に七巻で完結している）。

私はこの作品の単行本の第一巻が出た頃に偶然雑誌の書評欄でこの漫画の存在を知り、早速購入して読み、市立図書館に新規採用された司書の主人公がレファレンスに奮闘する姿が図書館的にきちんと描かれているのに感動して、作者が特に図書館のヘビーユーザーというわけではなく、担当編集の方からの提案でこの作品を描くことになったというのをあとがきで読んで大変驚き、よっぽどちゃんとした図書館で取材をしたのだらうと、当時この欄に書いていた。

その時単行本が「全一巻」と紹介されていたので、もうこれでおしまいということかと思い、是非続けて描いてほしいと言っていた割には、その後を確認することもなく現在に至ったわけだが、この作品はやはり好評だったようで、連載が続くことになり、ついで取材協力やアドバイスをしていただける図書館員を探しているという記事がカレントアウェアネスの2011年12月22日に掲載されていたことが

今回改めてわかった（その時は埜納氏への単独インタビューの記事だった）。

それで名乗りをあげたのが当時横浜市立図書館に勤務されていた吉田氏だったわけだが、作者のみの取材等で描かれていた一巻でもかなりきちんとした内容だったものが、現役図書館司書の吉田氏のサポートでさらに内容がリアルな、図書館員として充分以上に読み応えのあるものになっていたことが、早速二巻目以降を購入（六巻が手に入れられなかったが）して読んでよくわかった。特に自分が今勤務している図書館では手をつけることができていない、多文化サービスや学習障害をもつ子どもへのサービスをテーマとして取り扱った章ではいろいろ考えさせられた。

ラストは、市役所からの異動で左遷感満々で主人公と敵対するような存在だった同僚が、奮闘する主人公に刺激を受けてレファレンスを始めとする図書館の仕事に目覚め、また市役所に異動することになったものの、実は通信で司書資格取得のための勉強を始めていて、「戻ってくる」のでそれまでこの図書館をよろしくと宣言するところで終わっていて、ベタといえどもベタな結末なのだが、この「戻ってくる」という感覚は図書館、特に常に異動の危機にさらされている公共図書館職員ならではの感覚と、妙なところで感心してしまったのであった。

今回のインタビューの最後に吉田氏は、この作品は「人生を豊かにできるものを図書館は提供できるという可能性を描いてくれているし、主人公の利用者に向き合う懸命さは司書としての初心に立ち返らせてくれます。」と語っているのだが、多分私が一番感じいったのがこの部分で、昨年のコロナ禍からどんどん気持ちがすさんでいって立場的にカウンターに出ることが少なくなっていたこともあり、かなり図書館の仕事に対してやる気を失っていたのを改めて実感したというのがあった。

幸いなことに、職場が変わってカウンターに出ることも増えたので、これを機会に私も初心にかえり、頑張ろうと思った次第である。（やました あおば）

大いなる知の空間「ヘルメスの図書館」によるこそ

— 「bibliotheca hermetica 叢書」 —

関戸 詳子

2013年からヒロ・ヒライさん監修の bibliotheca hermetica 叢書（通称BH叢書）を刊行しています。bibliotheca hermetica とは「ヘルメスの図書館」という意味、哲学と歴史を架橋し、テキスト成立の背景にあった「知のコスモス」に迫るインテレチュアル・ヒストリーの魅力を伝えるシリーズです。

とはいっても、「ヘルメスの図書館?」「インテレチュアル・ヒストリー?」と聞きなれない言葉に戸惑う方もいらっしゃるでしょう。まずはここから入っていきましょう。

ヘルメスとは、ギリシア神話に出てくる商業や旅行の神様のほうではなく、伝説的な錬金術師であるヘルメス・トリスメギストスを指します。3世紀頃までに

成立した「ヘルメス文書」は彼が著したとされる錬金術、自然魔術、占星術を主とした古代思想の文献写本のこと。そのヘルメスの図書館が現代にもあったら、そこにはどんな書籍が入れられるだろうとイメージして作られたのが「ヘルメスの図書館=BH」叢書なのです。

図書館長=叢書の監修はルネサンス思想史の研究者のヒロ・ヒライさん。「錬金術・自然魔術・占星術に関するテーマについてソリッドな歴史研究を行っている海外の学術文献を紹介し、訪問者との交流も促進するインタラクティブなウェブ・サイト」bibliotheca hermetica を1999年から主催し、この分野で世界的に活躍されている方です。

ではインテレチュアル・ヒストリーとは？実は私もまだ理解しきれていないのですが、思想史・哲学史と呼ばれる分野で行われているテキストの解釈だけではなく、それらのテキストがどのような知の営みの歴史の元に成立したのか、歴史学の知見もあわせて研究していく学問のようです。たとえば『テ

クストの擁護者たち』という本では、歴代の古典をたどることで知の山脈の山頂踏破をするのではなく、稜線や谷の探索、つまり古典を今では忘れられた多数の同時代のテキストの中に置き、それらが成立した歴史的背景、生じた論争や誤読も考慮にいれながら、なぜその本が結果として古典として残され伝えられたのかの探究が行われています。

インテレチュアル・ヒストリーについてもっと知りたいと思われた方は、弊社のサイト「けいそう

ビブリオフィル」のBH叢書の紹介ページで、ヒライさんご自身による解説動画「インテレチュアル・ヒストリー入門」をご覧くださいいただけます。

これまでのラインナップは下記5冊です

（すべての書籍に、編集、監訳などの形でヒライさんが関わっていますが、下記では省略しました）。

榎本恵美子著、坂本邦暢解説『天才カルダーノの肖像：ルネサンスの自叙伝、占星術、夢解釈』／菊地原洋平著『パラケルススと魔術的ルネサンス』／A・グラフトン著、福西亮輔訳『テキストの擁護者たち：近代ヨーロッパにおける人文学の誕生』／山田俊弘著『ジオコスモスの変容：デカルトからライプニッツまでの地球論』／L・M・プリンチーペ著、ヒロ・ヒライ訳『錬金術の秘密：再現実験と歴史学から解きあかされる「高貴なる技」』

ご覧のように、叢書が扱うのは近代以前の時代です。職業的専門家が現れ、学問の細分化が行われる以前、今でいう哲学、科学、宗教、文学、芸術といった各分野はわかれることなく密接に関連し、知の巨人たちが人間やこの世界の神秘の解明に取り組んでいました。叢書を通し、この豊かな知のコスモスに一人でも多くの方が接して下さったら嬉しいです。（せきど しょうこ:勁草書房）



ヒロ・ヒライ監修「bibliotheca hermetica 叢書」現在5巻/A5判、上製／各4500～7500円＋税／勁草書房／2013～2018年

図書館を離れて (第53回)

— 時代小説の中のお仕事女子① —

並木 せつ子

数年前から積極的に時代小説を読むようになった。もともとは藤沢周平以外、自分から進んで読みたい分野ではなかった。関川夏央は苦しい時の逃避先が時代小説で、《私は「現代」に疲労していて、救いを遠い過去の、いわば「根も葉もあるおとぎ話」のなかに求めている》と『おじさんはなぜ時代小説が好きか』に書いている。《人をたのませ、人を勇気づけることができる書きもの、それらはみな文学》だとも。葉室麟も時代小説は《自分が直面する現実とは別の社会や人間関係を見せてくれる》(『週刊文春』2009.5.7)と言っている。私のここ数年の時代小説への傾倒も、この辺にあるのかもしれない。

外目には天真爛漫に見える子どもだって、悠々自適に見える年寄りだって、心の中に一点の陰りも無い人などいるはずもない。生きていれば、心に黒雲はいくらでも湧いてくる。逃げ道は自分で探すしかないのだ。数年前までは本に集中すること自体が避難先だった。どういう分野でもどんな内容でも大丈夫だったのに、だんだん内容の重いものや暗いものを心の奥底が拒否するようになってきた。手応えのある本に出合った時の充足感は大いだが、必要なのは切れ目なく本に集中してられることだった。

そんな時手にしていたのは、例えば『「罪と罰」を読まない』(『罪と罰』を読んでいない4人による読書会)、『るきさん』(高野文子の漫画、るきさんの魅力が大)、『ヨーコさんの言葉』(佐野洋子の著作から抜粋、イラストが良)、『菜の花工房の書籍修復家』(小説の筋より修理の工程に興味)など。漫画ばかり読んでいたわけではないが、読書放浪の果てには『いじわる婆さん』まで買っていた。

ある時、地元の福祉事業所から「弁当」というテーマで、本の紹介文を依頼された。紹介する本は『おべんとうの時間』(阿部了・直美著)と、『聞き書ふるさとの家庭料理』(農文協)の「日本のお弁当」の巻にした。これに小説も加えたいと思っていたところ、たまたま書店の新刊コーナーで見かけた

のが『弁当屋さんのおもてなし』(喜多みどり著)だった。すぐ買って帰ったのは言うまでもない。これをきっかけに、しばらくは食べ物につられて、『かもめ食堂』、『鴨川食堂』や『食堂のおばちゃん』シリーズ、小川糸の本などを読んでいた。食べ物関連の小説やエッセイは売れ筋だから山ほどある。次があると思うと安心できた。こんな流れの中で出会ったのが『みをつくし料理帖』だった。今まで私が時代小説に抱いていた薄暗さや生臭さが無い。まるで一少女の成長小説のようだ。これが時代小説と私の新たな邂逅だった。

気がつけば文庫——特に書き下ろしは、時代小説の宝庫だった。書き下ろしやオリジナルが増えているのは承知していたが、ここまでとは。《ここ数年の時代小説ブームにおける最大の特徴は、文庫書き下ろしのスタイルが確立されたことである》(『週刊文春』2009.5.7)、《ゼロ年代〔2000年代〕における、歴史・時代小説のもっとも大きなトピックは、文庫書き下ろし時代小説のビッグ・ウェーブであろう。……まさに百花繚乱の感がある》(『文蔵』2010.11)。…というのが、2000年以降の文庫時代小説の流れだった。

出版点数の増加も瞠目に値するが、内容も多彩になっていた。《過去自体をつくり替え、現在を超える想像力満載の時代小説が続々登場しています。たとえば、ファンタジーやSF、ミステリー、前衛的な要素を盛り込んだ分野が人気です》(『週刊ダイヤモンド』2010.1.9 高橋敏夫)とあるが、畠中恵や西條奈加が、時代小説で「日本ファンタジーノベル大賞」を受賞しているのは象徴的である。他の畑から参入した作家——ミステリーの宮部みゆき、漫画原作者の高田郁、児童文学のあさのあつこ、ジュニア小説の倉本由布、漫画家の畠中恵など——が多いのも多彩さの要因かもしれない。

主人公が料理人の時代小説から読み始めて、さらに和菓子職人へと広げて読むうち、時代小説のもう一つの特徴に気がついた。女性の書き手が多

いことと、女性の主人公が多いことである。《最近の時代小説のジャンルにおける特色は、……自己の世界を切り拓いた、女性の作家が際立った活躍をしていることである》（『日本古書通信』2002. 7）、《時代小説といえば、かつては男性の書き手中心で渋いイメージが強かった。だが最近では、……女性の活躍が目立っている》（『Themis』2009. 6）。

和田はつ子は《絶対的な男社会の中でも前向きに、自分の思うことをやろうとする女の人を書きたいと思っているのです》（『本の窓』2006. 3. 4）と言っているが、女性の主人公が仕事をもって一人前を目指す話が多いのも、今までの時代小説にはあまり見られない設定だった。江戸時代にあり

えない話と言ってしまうえば身も蓋もない。上田秀人は《時代小説って大人が楽しめるファンタジーだと思う》（『文蔵』2018. 11）と言っている。こうした流れの中で《「男性の読物」の印象が強かったこの世界に、女性のファンが確実に増えている》（『Themis』2008. 3）のは必然と言えるだろう。

江戸時代が舞台の時代小説で、仕事を持っている女性を「お仕事女子」と名づけてみた。主人公たちの健気さ初々しさが、職業婦人でもキャリアウーマンでもない、当世風の言葉を思いつかせたのである。当面の読書放浪は「お仕事女子」の時代小説に決まった。読み重ねていくと玉石混淆、中には血生臭い話もあるが、それはそれ「お仕事女子」の力で乗り切っていくのだ。（なみき せつこ）